様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 ２８ 日現在

機関番号：１７７０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ１７３５０

研究課題名（和文）unlearn概念を介した人種主義に抗う教育実践に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Anti-Racism Education based on Unlearn theory

研究代表者
酒井　佑輔（sakai, yusuke）

鹿児島大学・法文教育学域法文学系・准教授

研究者番号：３０６３２５９１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：北米における人種主義に抗う教育実践に関する調査研究並びにガヤトリ・スピヴァクを中心としたunlearnの概念に関する理論研究を通じて、（１）西欧・北米におけるunlearn概念と日本のunlearn概念の議論の整理やその議論の特徴や差異、（２）理論研究の成果を大学での授業等の教育実践に実際に落とし込むことで日本社会が抱える人種差別やマイノリティ排除に抗する教育実践に対するunlearn概念の理論的可能性、（３）社会的排除に抗うESDにおけるunlearn概念の可能性について明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、unlearn概念をレイシズムや社会的排除に抗う教育実践に位置づけることで、包摂の取り組みが孕む排除の論理を常に意識化し、不可視化されるサバルタンや他者に対し一層の注意や想像力を傾けることが可能となることを明らかにした。また、ESD（持続可能な開発のための教育）という文脈に引き付けた場合、それ自体は近年「地域」の動的・批判的把握を踏まえて境界線の絶え間ない引き直しを可能とし、地域の存立において異質な他者同士の集いが前提とされることで、地域の範疇からしばしばこぼれおちるサバルタン・他者との共生から協働への展開可能性も明示した。

研究成果の概要（英文）：This study critically analyzed unlearn theory in Japan, Western Europe and North America. And the study investigated the educational practice against racism in the United States and Canada, and revealed the possibility of unlearn theory on education practice, especially on the ESD(Education for Sustainable Development)in Japan.

研究分野：教育学

キーワード：unlearn　レイシズム　人種主義　教育　社会教育　spivak　サバルタン　被抑圧者

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．　研究開始当初の背景

日本社会では、ヘイト・スピーチに象徴されるような人種主義や排外主義の高揚、マイノリティに対する不寛容さの常態化傾向が指摘されていた。その一方で、未曽有の少子高齢化問題と激減する労働力人口の穴埋め策として、外国人労働者の大量受け入れの議論も進んでいた。このような社会状況にともない、外国人等の「他者」に対する差別や偏見が生じる構造を踏まえたうえで、多文化共生・異文化理解を目指した人権教育に関わる国際理解教育、社会教育の理論・教育実践研究は多く存在していた。また、人種差別や偏見などに抗うための教育に関するカリキュラム開発なども日本国内では盛んに行われていた。

しかしながら、教育実践やその評価・分析を実施する研究者・教育者の特権的立場性を捉え直す研究は、日本国内において十分ではないと考えられた。教育者・研究者が無意識のうちに学んできた偏見や差別意識、差別対象となる被抑圧者を生み出す社会構造との共犯関係を可視化し、教育者・研究者らの立場性が、教育実践や分析・評価枠組みに与える影響が理解され研究に位置づけられることで、はじめて差別や偏見の対象となる「他者」を解放するような、倫理的関係性に基づく教育実践が可能となると考えた。

そこで申請者は unlearn 概念に注目した。unlearn は、比較文学者のガヤトリ・スピヴァクが提唱したことで世界や日本で注目された概念であり、人種差別や性差別を構造的に理解した上で抗うための教育実践や、また、研究者自らが自己の価値観や社会的立場性を倫理・批判的に振り返るための議論が存在していた。例えば、自分自身をレイシャル・マイノリティとして定義した研究者（教育者）による、多文化教育の教師教育実践での批判的省察を通じた事例では、自己の標準英語への執着が支配的言説としての白人優越主義やレイシャル・マジョリティの視線を自ら内面化し、それを学習者へ押し付けていたことを可視化したうえで、学習者との新たな教育関係を踏まえた人種主義に抗する教育実践に取り組む研究等もあった。

そこで人種差別やマイノリティ排除に抗う教育実践の内実をより豊かにするためには、研究者・教育者の当事者性を倫理的・批判的に位置づけ省察する必要性を問う unlearn 概念を研究することが重要であると考え、本研究に取り組んだ。

２．研究の目的

本研究の当初の目的は、大きく分けて３つあった。まず１つ目に、北米において、unlearn 概念をキー概念とした人種主義に抗う教育理論の文献調査だけでなく、教育実践現場で参与観察を行うことで、それらの教育実践の内実を明らかにすることであった。２つ目に、ガヤトリ・スピヴァクが、自らの生まれ故郷である西ベンガル地方の貧しい農村地域において当時取り組んでいた“the Pares Chandra and Sivani Chakravorty Memorial Rural Education Project”非営利プロジェクトの教育活動を調査し、スピヴァクの教育観や unlearn 概念の理論的枠組みをより明確にすることであった。そして３つ目に、得られた研究成果をもとに、unlearn 概念を介した教育・学習実践の場としての大学での授業や公開講座を設定し、日本国内で人種主義に抗う教育実践の可能性を実証的に検証することであった。

３．研究の方法

北米における unlearn 概念を踏まえた教育理論と実践的展開に関する文献調査を進め、欧米の学術動向・特性を解明する研究を中心的に実施した。また、アメリカ合衆国ウィスコンシン州ミルウォーキーの YWCA が長年取り組んでいる unlearning Racism の教育ワークショップ並びにカナダブリティッシュコロンビア州バンクーバーにおいて教育委員会らが取り組んでいる unlearn 概念に基づく教育実践に関する調査を実施し、unlearn 概念が教育実践にどのように位置づき、理論的探究が進展し、実践研究に影響を与えているのか分析を進めた。最後に、得られた知見をもとに、申請者の勤務する大学において unlearn 概念を介した人種主義に抗う教育実践（共通教育授業後期科目「人種主義を考える」）に２年間取り組み、その実践可能性を検証した。

なお、本研究では、スピヴァクがインドで取り組む“the Pares Chandra and Sivani Chakravorty Memorial Rural Education Project”教育実践を分析することで、スピヴァクの教育観や unlearn 概念の理論的有効性の検討並びに実践寄与の可能性に関する研究を深めることも検討していた。しかしながら、調査地域の治安状況の悪化等の理由により、結果的に現地へと赴くことは叶わなかった。

４．研究成果

アメリカ・カナダの人種主義に抗う教育実践に関する調査研究並びにガヤトリ・スピヴァクを中心とした unlearn の概念に関する理論研究を通じて、まず西欧・北米における unlearn 概念と日本の unlearn 概念の議論の整理やその議論の特徴や差異を明らかにした。具体的には、日本でも広く議論されている比較文学研究者であるガヤトリ・スピヴァクによる unlearn の要素を、①サバルタン化をもたらす社会構造と自己との共犯関係の承認、②サバルタンとの倫理

的学習関係の構築に向けた想像力、の２点であると整理した。また、教育や学習という観点から日本独自の文脈において議論されている、①鶴見俊輔の unlearn（学び捨てる）、②大江健三郎による unteach（教え返す）と unlearn（学び返す）、③前平泰志による unlearn と<ローカルな知>、④学校教育現場での unlearn の議論の整理を試みた。unlearn の理論を検証した結果、全ての unlearn に共通する特徴として、①現代社会や学校教育等を通じて自分自身が築き上げてきたものの見方や認識、あるいはそれを構成する知識の在り方を批判的に検討し再構築する、②再構築する際には、既存の社会構造や認識によって自己よりも社会的に劣位におかれる「他者」から自分自身が学ぼうと心がけること、の２つを明らかにした。

以上の unlearn の整理を踏まえたうえで、本研究では社会的排除に抗う持続可能な開発のための教育（ESD：Education for Sustainable Development）における unlearn 概念の可能性についても明らかにした。具体的には、unlearn 概念を教育実践に位置づけることで近年しばしば議論される「地域」の動的・批判的把握を踏まえて境界線の絶え間ない引き直しを可能とし、地域の存立において異質な他者同士の集いが前提とされることで、地域の範疇からしばしばこぼれおちるサバルタン・他者との共生から協働への展開可能性も明示した。

また、博士論文との関連では、ブラジルアマゾントメアスーで農業に従事する３人の日系移民による営農実践や自然観、並びにブラジルアマゾンの日系社会においてしばしば社会的に劣位に位置づけられるブラジル人(主に先住民やカボクロと称される人びと)に対する認識を明らかにしたうえで、unlearn が農業における教育や学習において展開している可能性があることを実証的に明らかにした。そして、このような日系移民による農業を通じた unlearn によって、トメアスーの持続可能な農業発展が駆動していることを仮説的に明示した。

北米での現地調査からは、unlearn 概念を位置づけた人種主義に抗うための教育方法論（workshop の方法や教育プログラムの構成方法、教材開発）等に関する知見を得ることができた。

以上の研究の成果を、申請者が所属する大学の授業実践（共通教育授業後期科目「人種主義を考える」）に実際に落とし込み、計２年間授業に取り組んだことで、日本社会が抱える人種差別やマイノリティ排除に抗する教育実践に対する unlearn 概念の理論的可能性を検証した。なお、教育実践に関する研究成果は現在まとめているところである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計３件）

（１）酒井佑輔「地域とともにある鹿児島大学が育成する「グローバルな視点を有する地域人材」とは―鹿児島における在留外国人の現状を手掛かりに―」鹿児島大学『かごしま生涯学習研究―大学と地域』、2017 年、１号、pp.26-39、査読なし。
（http://hdl.handle.net/10232/00029735）

（２）酒井佑輔「アマゾンの開発と日本人移民～パラ州トメアスーのアグロフォレストリー農法における教育～」『XI Congresso Internacional de Estudos Japoneses no Brasil XXIV Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa TESSITURAS: O ENCONTRO DOS POVOS NO ENCONTRO DAS ÁGUAS』、2016 年、pp.135-158、査読なし。

（３）酒井佑輔「ESD は地域の社会的排除／包摂とどう向き合うか―ガヤトリ・スピヴァクによる unlearn の可能性―」日本社会教育学会年報編集委員会編『日本社会教育学会年報第 59 集　社会教育としての ESD ： 持続可能な地域をつくる』、2015 年、pp.44-54、査読あり。

〔学会発表〕（計６件）

（１）Yusuke SAKAI,“O outro lado da natureza e da educação ambiental no Japão contemporâneo”, IV CONGRESSO INTERNACIONAL DE LITERATURA E ECOCRÍTICA、2018 年６月４日、Universidade Federal do Amazonas、招待講演。

（２）酒井佑輔「Reconsidering Paulo Freire’s Pedagogic Theory on Environmental Education in Japan」日本環境教育学会第 28 回年次大会 INTERNATIONAL DISCUSSION MEETING FOR A SPECIAL ISSUE OF JAPANESE JOURNAL OF ENVIRONMENTAL EDUCATION: ENVIRONMENTAL EDUCATION IN ASIA、2017 年９月３日、岩手大学、口頭発表。

（３）酒井佑輔「地域に立脚した移民学習の現代的意義―鹿児島を出た民の歴史を手掛かりに―」日本国際理解教育学会第 27 回研究大会、2017 年６月３日、筑波大学、口頭発表。

（４）酒井佑輔「アマゾンの開発と日本人移民～パラ州トメアスーのアグロフォレストリー農法における教育～」『XI Congresso Internacional de Estudos Japoneses no Brasil XXIV

Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa TESSITURAS: O ENCONTRO DOS POVOS NO ENCONTRO DAS ÁGUAS』、2016 年 9 月 22 日、アマゾナス連邦大学、口頭発表。

（5）酒井佑輔「社会教育において人種・人種主義（レイシズム）を問うことの現代的意義と課題」日本社会教育学会第 62 回大会，2015 年 9 月 19 日、首都大学東京、口頭発表。

（6）Yusuke SAKAI “O passado e o presente da relação entre o Japão e a Região Amazônica no Brasil, tendo como foco o açaí”, 3º Ciclo de Palestras Língua, Literatura e Cultura Japonesa、2015 年 9 月 14 日、アマゾナス連邦大学、口頭発表。

〔その他〕

・酒井佑輔『ブラジルアマゾンの日系移民による教育と unlearn に関する研究 ： パラ州トメアスーにおける農業発展を踏まえて』東京農工大学連合農学研究科農林共生社会科学専攻学位論文（学術）、2017 年、pp.135。（http://hdl.handle.net/10636/00001523）

・授業「人種主義（レイシズム）を考える」（鹿児島大学共通教育）を平成 29 年度前後期並びに平成 30 年度後期に実施し研究成果を学生に還元。

６．研究組織
（１）研究分担者：なし
（２）研究協力者：なし
※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。